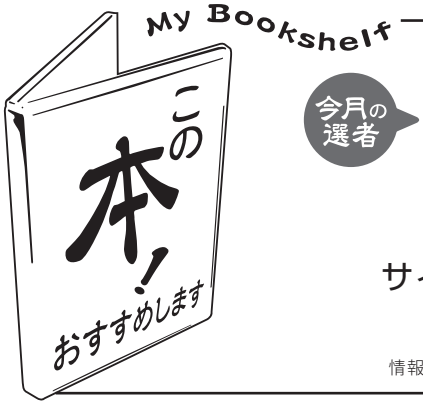
情報管理 JOHO KANRI 2010 vol.53 no.6 9 September
Journal of Information Processing and Management
http://johokanri.jp/



今月の選者

長神風二（東北大学脳科学グローバルCOE）

知はデモクラシーのために
サイエンスコミュニケーターが思う図書館のこと

情報管理　53(6), 348-351, doi: 10.1241/johokanri.53.348 (http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.53.348)

科学を広める，科学の魅力を伝える，そんな仕事だと思われているサイエンスコミュニケーションを生業にして幾年月。どうしてやっているんだ？という問いに，簡単に答えるのによく使われるのは，“説明責任”。曰く，科学技術はたくさん税金を使っているのだから！ あるいは，“利益誘導”。科学技術でこそ国は発展する，そのためには，資金と人材が必要，みんなを説得して，そして，次世代をリクルートしないと！ もちろん，科学は「楽しい」だから伝えるんだ！っていうのもあるにはあるが，それも，上記の太い流れの中に取り込まれてしまう。筆者は，恐らくは，周囲からはそういう流れの真ん中にいると目されてきたようだけれど，違和感がぬぐい切れずに，「自分が本当にやりたいことは，科学という知を，人々の手に取り戻すことなんだ！」と，こうして力んでみても，あまり通じない。

そんなとき，ふと横を見ると図書館があった。

『未来をつくる図書館―ニューヨークからの報告』菅谷明子
岩波書店（岩波新書），2003年，798円（税込）

http://www.iwanami.co.jp/.BOOKS/43/2/4308370.html

同書で語られるのは，箱モノでも，干からびた文献でもなく，いきいきと図書館に集う人の姿。そこでビジネスを立ち上げ，芸を磨き，治療のための道を見つける人々。そして彼らがやがて成功して寄付者としてかえってくる循環。利用者一人一人が，それぞれのやりたいことを実現していく過程を，ニューヨーク公共図書館が道具となり場となり，支援していく魅力的な姿を，いくらなんでも褒めすぎでない？と思うほどに，余すところなく伝えている。初刷は2003年，ところどころ，9･11テロから間もないニューヨークの，社会全体が是が非でも前向きになろうとしているむき出しの情感までもが伝わってくる。図書館に行きたくなり，働きたくなる本だ。社会と科学の間に身をおくサイエンスコミュニケーターとしては，知が生きた形で人々の手に渡っている現場の話として読んだ。図書館が人々に提供している知が支えているのは，彼らの研究，仕事，そしてそれぞれが生きる暮らしそのものだ。知を個人が直接得ることで，一人一人が独立した市民となる。デモクラシーの根源だ。投票権があることが民主主義ではない。個人が，何かを選択し意思を表明し，何かを実現するためには，情報が必要だ。そして，情報にア

クセスできる権利がまず必要だ。図書館がそれを保障する。図書館が個人の未来を作るのだ。

が，しかし，これ，図書館に「しか」できないこと？

『電子図書館　新装版』長尾真
岩波書店，2010年，1,575円（税込）

http://www.iwanami.co.jp/moreinfo/0057030/index.html

2003年の段階で，菅谷氏の本は成長期にあったインターネットについても一章割いているが，先立つ1994年に，長尾真氏は『電子図書館』を出版している。長らく絶版だったが，最近，新装版が出版された。2010年の今，読んでみると，細部を措(お)けば的中した予言の書とも読める。「電子」図書館として，図書館から人々がリアルに集う場としての機能がはぎ取られると，集積される知が持つ意味が浮きぼりにされる。人々は，一冊の本をまとまりとして受け取る必然性からは解き放たれる。新装版の前書きで，「本という一つの単位をその中に存在する章や節，パラグラフといった任意の単位に解体し」と長尾氏は語る。各論の知を独自に意味づけて体系化する権利が，著者の独占から解放され，読者・利用者の側にももたらされる。市民自らが知を独自に編集し直し作り直すための装置としての電子図書館に，サイエンスコミュニケーターは，知の双方向性を見る。人口に膾(かい)炙(しゃ)している双方向性の形とは異なるが，より内実のある形だ。

しかし，筆者が扱うサイエンスの，特に現在進行形の研究の知は，普通の市民が通う図書館には，ちっとも入ってこない。本当は，そこにこそ，双方向性が欲しいのに。なぜだろうか？

『専門知と公共性　科学技術社会論の構築へ向けて』藤垣裕子
東京大学出版会，2003年，3,570円（税込）

http://www.utp.or.jp/bd/4-13-060302-7.html

学術の知は，市民が通うような図書館には入っていかない。英語で書かれているからとか，市民には理解不能なほど難解だから，といった，表層的な理由はよく語られる。そうではなく，学術の専門知がそもそも自閉的な傾向を持つことにこそ問題の根がある，と読み解いているのが，藤垣裕子著『専門知と公共性』。「ジャーナル共同体」という概念で専門集団を規定し，妥当性境界という言葉で専門家がそこから先には出てきて責任を持ってものを言わない境界線を鮮やかに示してみせた論考だ。第2部の「専門主義と公共性」では，科学の公共性について，抽象的な語りを中心としながらも，サイエンスショップやシナリオワークショップといった具体的な社会的な意思決定プロセスの手法も踏み込んで書かれている，実践家にも目配りした本だ。

その第2部を通じて，科学技術の持つ専門性が持つ閉鎖性は，そもそも持つべき公共性が公開性と対置して描かれている。公共性の根拠を説明責任なんぞに求めていては，閉鎖性を打破できない。筆者としては専門知ができる過程に踏み込んだことを考えてみたい。

『予定不調和―サイエンスがひらく，もう一つの世界』長神風二
ディスカヴァー・トゥエンティワン，2010年，1,260円（税込）

http://www.d21.co.jp/modules/shop/product_info.php?products_id=741

最近，筆者が講演などで試案として提示しているのは，研究活動で得られる知を，論文の形でまとめる（＝「ジャーナル共同体」に入る）まで待つことなく，生のまま公共の空間に提供するようなシステムだ。具体的には，誰もがアクセスできるネット上の空間に，日々の研究ノートが接続されているようなイメージだ。話すと多くの研究者からは反論を頂く。それは学術ではない，研究ではない，と。それは，そうだろう。長尾氏が語った電子図書館が，本という一つの単位をパラグラフにまで解体してしまう可能性を示したように，筆者が話したシステムは，論文を個別の実験データにまで解体してしまう。本の著者が知の体系化を行う権利の独占を奪われるように，研究者は自らの実験結果を意味づける特権を奪われる。反発を頂くわけだ。だからこその，本質的な双方向性を秘めるのだけれど。また，筆者の試案には，知的財産の面からの反論も頂く。その時は，先願主義と先発明主義を全世界で一斉にやめて，先公知主義にすればいいのでは？と返している。

この構想を，1冊にまとめたものが，と紹介できるといいのだが，今のところ，ない。代わりに，ではないが，本来公共の中でバランスを保って発展するべき科学の知が，何らかの理由で部分が突出してしまった場合に起こってしまうであろうことをフィクションで想像しながら，人々が関わりながら発展させるサイエンスを考えようとしたのが，拙著『予定不調和―サイエンスがひらく，もう一つの世界』。一見，勝手に進んでしまうだけに見える科学と技術の進歩は，もともと人々が関わることで選択できる未来の形なのだ，という主張を展開したつもりだ。

『市民のなかの博物館』伊藤寿朗
吉川弘文館，1993年，2,100円（税込）

http://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b34294.html

個人が知を得て，それがデモクラシーを作る，と前述したが，果たして，本や文字情報を介してしか知は伝えられないのだろうか。かつて科学館で働いていた筆者としては，実物が持つ力，オリジナルの

物が持つ力に対して愛着がある。

市民に知の権利を保障するのに，科学館や博物館もまた役割を果たせるはずだ。伊藤寿朗著『市民のなかの博物館』は，1991年に早世した著者の遺稿をもとに1993年に出版された。一節を引こう。「博物館は市民に必要な力量の形成を総合的に保障し援助する―モノシリをつくるためのサービスを行うのではなく，生活を自ら築いていくのに必要な手がかり，また生活の幅を広げ，文化を創造していくための素材など，人びとの問題関心の幅に応じた対応が求められています」云々。理想とするところは，菅谷氏の描く公共図書館の姿と，基本的に変わりはない。実際，伊藤氏も著書の中で，具体的な資料が媒介となって学習や教育（この2つの用語が使われていることに時代を感じるのだが）が成立するところが，博物館の特徴と明言している。つまり，突き詰めればそこにしか違いはないのだ。

筆者の専門のサイエンスコミュニケーションに引き付けて言えば，科学の知を供するのに，科学館・博物館と図書館の違いは，実際の物を介するか，印刷され得る情報に多くを頼るかの違いしか，本質的には存在しない。果たして，日本の現状，論文などの形になったものは図書館を通じて，そして研究の実際と現物は科学館を通じて，科学の知を提供し，多くの個人に知へのアクセスを保障していこう，という方向に向かっているのだろうか。

国や，その関連機関が進めるサイエンスコミュニケーションが，科学館に多くを期待する割には，図書館に期待する素振りを見せないのはなぜだろう。図書館は科学館よりも桁違いに数が多く，利便性も高い場所にあることが多いのに。『情報管理』誌の発行母体が運用している事業も例外ではない。応募資格に拠点科学館の文字はあるが，図書館とは書かれない。科学館を持たない，持てない自治体の数は多いが，図書館ならばあるというところは多いのだ。別に図書館を擁護しようとしているのではない。人々のそばに行き，一人一人を支援するのに何が最適かを考えているのだ。

結局，多くのサイエンスコミュニケーション事業は，科学技術は多額の税金を使っているから，という説明責任に終始し，あるいは，次なる予算や人材の獲得手段に堕していて，知を持って独立した個人，デモクラシーを担う市民を作るために，科学の知を開いていく，ということを目的にしていないことに遠因が求められはしないだろうか。科学技術創造立国などという若い世代には戯言にしか聞こえないお題目に寄り掛かり，予算を使い，もらい続ける言い訳の行為がサイエンスコミュニケーションだ，では，現場も元気にならない。サイエンスコミュニケーションが担っているのは，創造できる独立した強い個人を作り支援することであり，それはデモクラシーそのもので，そして未来を作ることなのだ。

知の目的を問うている。そのための公共と個人を考えて，5冊を紹介した。

執筆者略歴

長神　風二（ながみ　ふうじ）

大学院で生物物理化学を研究した後，日本科学未来館へ。特別企画展「脳！－内なる不思議の世界へ」，大型映像「アースストーリー　～恐竜の進化とヒトの未来～」，「第18回世界宇宙飛行士会議」，「ライブトークScience Edge」シリーズなどに主担当として従事。科学技術振興機構で，「サイエンスアゴラ」を開始し2006，2007を担当。2008年1月から東北大学。脳科学グローバルCOEと医学系研究科で広報・コミュニケーション担当。